

男らしさ・女らしさから両性具有へ

——米国における心理学的測定研究の歴史——

渡邊惠子

はじめに

わが国では、男らしい男性・女らしい女性こそ、男女のあるべき姿として、長い間支持されてきている。男にとって女らしい男、女にとって男まじりの女と評されることは、今でも、かつてほどではないにしても自己の性を否定される経験となる。男らしい・女らしいというこの抽象的概念は、具体的な生活のなかで、男は仕事、女は家事・育児という役割分担に直結され、いわゆる伝統的性別役割分担と伝統的性別役割観を形づくってきた。

戦後の男女平等思想への転換は、考えてみると、男性の生活面の役割分担は全体的には大きく変わることなく、女性の側に男女の平等化すなわち男性と同質の権利、行動様式への拡大的変質をもたらしたともいえよう。その結果は、男は仕事、女は家事・育児に加えて仕事、さらに近年は高齢者介護という二重、三重の負担を背負う現状である。しかし、同時に、この転換は、女性の視点からあらゆる問題をとらえ直す、ここ約十年の試行錯誤的試みも生み出した。その過程で、女性の問題が男性の問題でもあることが、しだいに浮きぼりにされてきた。こうしたわが国の動向は、男女差別撤廃への国際的動向ときわめて密接に関連している。

男らしさ・女らしさの心理学的研究も、こうしたわが国や海外の社会的動向を背景として発展してきている。しかも、わが国の戦後の心理学は、とくに米国の心理学の影響を大きく受けてきており、この分野の研究も例外ではない。本稿では、とくに米国における男らしさ(Masculinity)・女らしさ(Femininity)の測定具(MFT⁽¹⁾テスト⁽²⁾)の開発・発展の経緯をたどり、男らしさ・女らしさの概念や測定における問題点を探ることとする。

一 次元MFテストの開発

男らしさ・女らしさを測定するMFテストの開発は、一九二〇年代の半から手がけられ、一九三〇年代に入り結実した。

その第一は、ターマン・マイルズの「態度興味分析テスト(Attitude-Interest Analysis Test: AIAT)」と偽装の名をつけられたMFテストである(Terman, L. M. & Miles, C. C., 1936)。このテストは、連想・知識・情緒反応・興味など七領域において、性差が検出された四五六項目から成る(表1)。予備調査の結果に基づき、各項目の、男性に回答の多い選択肢にプラス一点、女性に回答の多い選択肢にマイナス一点、回答に性差のない選択肢に〇点が与えられている。採点は、各人について、領域ごとの合計点およびこれらにさらに重味をつけて合計した最終のMF得点を算出する。つまり、得点がプラス方向に高いほど、より男性的、マイナス方向に低いほど、より女性的と判定される。このように、ターマン・マイルズは、きわめて多岐にわたる項目内容から成る両極一次元のMFテストをはじめて開発したのである。

ほぼ同時期に、ストロングにより「職業興味検査(Vocational Interests Blank: VIB)」の下位尺度のひとつとしてMFテストが開発された(Strong, E. K., 1936, 1943)。このテストは、職業・教科・娯楽などの八興味領域において、ある職業の人びとが他の職業の人びとと差を示した四〇〇項目から成る。MFテストは、これら全項目に、回答比率の性差に応じた重味づけがなされたものである(表2)。ここでも、男性の回答が多い選択肢にプラス、女性の回答が多いものにマイナスの重味づけがされている。したがって、全項目の合計得点であるMF得点は、プラスに高い方がより男性的、マイナスに低い方がより女性的と判定される。このように、ストロングのMFテストは、ターマンらのものと同様、両極一次元尺度であるが、各項目にも重味が与えられている点で、それとは異なっている。

表1 ターマン・マイルズのMFテスト(A形式)

領域①	項目数	選択肢	項目・選択肢の例②
(1)言語連想 (×1)	60	4	(刺激語) 鋭い→鋭い(-), 平らな(-), ナイフ(0), ピン(+)
(2)インクプロット 連想(×1/3)	18	4	(略)
(3)知識 (×1)	70	4	青色は[茶色(+), ねずみ色(+), ピンク(+), 紫(-)] ともっとも似合わない
(4)情緒的反応 と 道徳的態度 (×1)	70 106 36	4	怒り(17項目): あなたがしないことに対して非難される こと→非常に怒る(-), かなり怒る(0), 少し怒る (0), 少しも怒らない(+) 怖れ(20項目): 自動車 嫌悪(18項目): ひげを剃っていない男 同情(15項目): 人を咬んだために殺される犬 ----- 公園で花をつむこと→非常に悪い(0), かなり悪い(-), 少し悪い(-), 悪くない(+)
(5)興味(好嫌) (×2)	118	3	職業(25項目): 建築家, 図書館長 人物(12項目): 理屈っぽい人, 非常に寛大な人 小説・学校(14項目): 探偵小説, 社会問題 運動・娯楽(20項目): スケート, 宴会 具体的書物(23項目): クリスマスカード, ロビンソンク ルーズー その他(24項目): もしあなたが画家ならば, 何をかきた いか
(6)人物好嫌 と 命題判断 (×1)	28 14	2	ビスマルク(+), フーパー(-), ムッソリーニ(+), ナ イチングール(-) ----- 顔を見ればいかに賢いか判る→真(-), 偽(+)
(7)内向的反応 (×1/3)	42	2	人に指導されるのが好きですか→はい(-), いいえ(+)

注) ①()内は, 各領域の重味づけ。②選択肢の(+)は(+1)点でM得点, (-)は(-1)点で
F得点となる。③各領域の合計点に重味づけの値をかけた値が, 各領域のスコア, 全領域
のこのスコアを合計した値がMFスコア。
(村中兼松, 1974より作成)

表2 ストロングの男性用職業興味検査(改訂版)

領域	項目数	項目		例①
(1)職業	100	24 土木技師(+4) 32 電気技師(+4) 60 機械技師(+4)	21 銀行の出納係(0)	39 花屋(-4) 43 インテリア・デザイナー(-4) 53 図書館員(-4) 74 私設秘書(-4)
(2)教科	36	121 手工芸(+4)		119 文学(-4)
(3)娯楽	49	139 狩猟(+3) 180 機械的処理(+3)		172 詩(-3)
(4)活動	48	187 キャプレーターの調整(+4) 188 配線修理(+4) 190 機械の操作(+4)	217 買物(0) 221 意見の公表(0)	194 室内の花飾り(-4) 232 珍しいレースの鑑賞(-4) 233 アンティーク 収集の鑑賞(-4)
(5)特徴のある人々	44		268 大声で話す人(0) 269 ゆっくり話す人(0) 278 香水を使う男性(0)	258 背の高い男性(-4)
(6)活動(順位づけ)②	(40)	304 ヘンリー・フォード(+4)	290 講演により人々に機械への関心をもたせること(0) 387 みずから親しみやすくすること(0)	
(7)興味(1対比較)	(40)			
(8)能力特質の有無	40		380 仕事の細かい計画立案(0)	

注) ①選択肢は、領域6,7をのぞき、いずれも「好き」「無関心」「嫌い」の3選択肢で、各選択肢は、選択の比率の性差に応じて重味づけられる。さらに項目に表中()内数値が重味づけられる。(+)が男性志向, (-)が女性志向。②3領域の各10選択肢より上位3位, 下位3位を選択。

(Strong, E. K., 1943より作成)

この時期には、さらにハザウェイ・マッキンレイにより、「ミネソタ多面式人格目録 (Minnesota Multiphatic Personality Inventory: MMPI)」の下位尺度として Mf テストも開発された (Hatharway, S. R. & McKinley, J. C., 1943, 1951)。この Mf テストは、同性愛倒錯の男子と一般男子および一般女子と一般女子で回答差の検出された六〇項目から成り、内容は読書や職業の興味・性に関する悩みや行動傾向・人間関係の認知や行動傾向など多岐にわたっている (表 3)。MMPI は、精神医学や臨床心理学の分野の診断資料を目的としているため、非患者である一般人の回答傾向から逸脱している人が高得点になるように作成されている。Mf テストでも、得点の高い者ほど非男性的ないし非女性的と判定される。⁽³⁾このように、この Mf テストは、「男性的—非男性的」「非女性的—女性的」という二つの単極一次元尺度を同一次元に想定しているから、基本的には両極一次元尺度といえる。

以上述べてきた、初期の Mf テストの代表的な三つのテストの特徴の比較を、表 4 に示す。

この表をみると、第一には、いずれのテストも、男らしさ・女らしさを基本的には両極一次元の概念で操作的に定義している点を指摘できる。すなわち、いずれのテストでも、「男らしい」の反対極は「女らしい」であり、男性的または女性的でないほど、女性的または男性的と判定される。両極一次元概念の批判が出たのは、これらの初期の開発から、約三十年後のことである (後述)。

第二には、いずれのテストにおける男らしさ・女らしさの概念も、統計的操作的概念にすぎないといえる。それは、いずれも、回答に性差が検出された項目を抽出・採択して尺度構成しているからである。項目内容が多岐にわたっているように、狭く限定されているように、性差が検出された項目を用いる限り、男性 (または女性) の方が女性 (または男性) より多く反応する項目内容が男らしさ (または女らしさ) ということになる。こうした操作的定义は、「MF テストにより測定されるものが男らしさ・女らしさである」という、極端な操作主義的概念とも結びつきやすく、知能テストと知能の概念の論争と共通する問題がある。⁽⁴⁾

表3 ハザウェイ・マッキンレイのMfテスト

領域①	項目数	項 目 例②	
		“ちがう”と回答すると、 Mfスコアは(+1)	“そう”と回答すると、 Mfスコアは(+1)
読書興味	5	11 機械関係の雑誌が好きです	317 恋愛小説をよむのが楽しみです
職業興味	10	524 自衛隊員(軍人)になりたい	14 図書館員のような仕事が好きです
活動興味	11	813 狩りが大好きです 1030 人形遊びをしたいと思った時期はない	56 演劇(芝居)が好きです 430 子どものころお手玉遊びが好きでした
対人行動	11	1010 人は自分のために役立つ人なので、友だちをつくる 128 誰かが私に不当な仕打ちをしたら物の道理をとおすため、仕返しをしてやる	108 見知らぬ人からじろじろ見られているように感じたことがある 427 人は嘘をつくとかみつかるのがこわいので、正直にしている
考え方	7	422 正しいと思うことは主張すべきだ 99 あの世には悪魔もいるし地獄もある	126 いざこざが起きたときには黙っているのがいちばん良い 425 来世はある
行動傾向	3	718 空想にふけることはほとんどない	77 手が不器用になったり思うように動かなくなったりしたことはない
自信	3	924 自信に満ちている	87 何かにつけて心配する
情緒的応反	2	319 めったに感情を害さない 626 蛇をこわがらない	
性	6	(821 性の話をするのが好きです)	
からだ	2	84 皮膚にいやな吹き出物が出たことはない	

注) ①領域は、ハザウェイらが定めたものではなく、筆者の分類による。②左列は、“そう”と回答すると、Mfスコアは(0)となり男性志向，“ちがう”と回答するとMfスコアは(+1)となり女性志向。右列は、“そう”と回答するとMfスコアは(+1)となり女性志向，“ちがう”と回答するとMfスコアは(0)となり男性志向。これらの合計得点を妥当性尺度により修正した値が男性のMfスコア、(±)の方向を逆転させた値が女性のMfスコアとなる。ただし、実際の採点手続きでは、Tスコアへの換算のさいに(±)の方向を逆転させ、上記の解釈とする。

③表中()付項目は、性別で採点が異なり、男子の場合を示している。

(日本MMPI研究会編、1969より作成)

表4 三つの1次元MFテストの比較

		AIAT-MF	VIB-MF	MMPI-Mf
		ターマン・マイルス (1936)	ストロング(1943)	ハザウェイ・マッキ ンレイ(1940)
テスト作成の目的		男らしさ・女らしさの 測定	職業ガイダンス	臨床診断
テストの次元		F ← $\frac{0}{ }$ → M	F ← $\frac{0}{ }$ → M	$\frac{0}{M }$ → nonM F → non F
項目抽出基準		性差の検出	職業群差のある項目 の性差の検出	性倒錯男子と一般男 子および一般男子と 一般女子の差の検出
項目 内容 と 項目 数	二つ以上の テストに 共通*	読書興味 23項目 活動興味 20 娯楽興味 } 職業興味 25 人物興味 58 情緒的反応 52	一項目 48 49 100 44 —	5項目 } 11 10 — 2
	各 テスト に 固有	言語連想 60 インクプロット 18 知識 70 道徳性 36 命題判断 14 内向性 42 その他 38	教科 36 能力・特質 40 その他 83	対人行動 11 考え方 7 性 6 その他 8
項目数		A形式 456	400	60
回答選択肢		4	3(好き・無関心・嫌 い)	3(そう, ?, ちがう)
採点		選択肢に(+, 0, -), 領域得点に重味づけ	選択肢・項目に重味 づけ	選択肢のはい又はい いえに(+1), 妥当 性尺度により修正

注) *二つ以上のテストに共通するとは、領域で共通し項目がほぼ似かよっているものをさし、
項目が完全に同じ文であるとは限らない。

第三に、それぞれのテストの開発目的が異なるにもかかわらず、共通する項目が多いことである。米国のこの時代に性差が検出された項目を用いてMFテストを作成しているのであるから、当然であるとはいえ、MFテストが以後男らしさ・女らしさの概念を固定化するに役立つことになる。

このほか、項目数・回答選択肢・得点算出法においては、それぞれのテストで異なり、多様な工夫がなされている。ともかく、男らしさ・女らしさを測定する初期のこれら三つのMFテストは、膨大なデータを統計的に処理して作成されたこともあり、以後すくなくとも一九七〇年代に入るまで、有力な代表的テストと評価されてきた。

二 一次元MFテストの発展

初期の一次元MFテストの開発から十年余のちの一九五二年、ゴウは、女らしさの測定具として「Fスケール (Femininity Scale)」と「パーソナリティ・テストとして」形容詞チェック・リスト (Adjective Check List: ACL) を作成した (Gough, H. G., 1952a, b)。Fスケールは、既存MFテスト項目と、社会的行動や興味を加えた五〇項目のうち性差が検出された五八項目から成る (表5)。女性の方が多く反応した回答選択肢に一点が与えられ、その合計点がFスコアとなる。Fスコアが高いほど女性的と判定される。このように、Fスケールは、○点を基点とした単極一次元尺度であり、一次元を基本とした尺度構成手続きを用いている点は、初期のMFテストと同一であるが、項目内容に社会的行動や興味を大幅にとり入れた点は、一九七〇年代後半以降盛んになった性役割測定具の先駆ともいえる。なお、ゴウは、このFスケールを、のちに開発した「カリフォルニア・パーソナリティ検査 (California Psychological Inventory: CPI)」の「下位尺度のひとつ」に採用した (Gough, E. G., 1965)。

また、ゴウの作成したもうひとつのテストACLは、形容詞を用いたパーソナリティ・テストであるが、ゴウとハ

表5 ゴウのFスケール

領域①	項目数	項目	例②
社会的領域 (独自の項目)	5	1 私は社会で重要な人物になりたい(F) 46 私は多くの社会的活動に加わりたい(T)	
	4	3 他人があるグループや国民のことを非難するのを聞くと、たとえ自分の評判が悪くなるとしても、私はいつも反対する(T) 26 私は他人より正しいことや誤りに対して厳格だと思ふ(T)	
	6	13 他人が仕事を正しくやってなくても、私にはその人を叱ることは難しい(T) 37 私はときどきなぐり合いをしたくなる(F)	
	5	10 私はパーティや他のにぎやかな面白い集まりに行くことが好きだ(F) 20 私は知らない人と話すのはむずかしい(F)	
	5	38 私はどちらかといえば感情をなにかと隠してしまうので、他人がそれに気付かずに私の感情を傷つけることがある(T)	
	5	22 私は仕事をしているときに、せきたてられるのがきらいだ(T) 25 私はなにか仕事をするとき、その仕事に対して本を読んだり研究したくなる(F)	
既存研究から	10	(怖れ・心配性・同情など)	
	9		
	3		
	6		

注) ①領域は、ゴウによるものではなく、筆者の分類による。②FはFalse(いいえ), TはTrue(はい)。()内F, Tに合致した場合(+1)点とし、Fスコアになる。

(村中兼松, 1974より作成)

イルブランは、その項目のうち性差の検出された形容詞五三(男性向き二八、女性向き二五)から成る「ACL性役割テスト(ACL Sex-Roles Scales: ACL-SRS)」を作成した(表6 'Gough, E. G. & Heilbrun, A. B., 1965)。その後、パーカーも同種の研究を行い、男性向き形容詞三九、女性向き形容詞七〇を検出した(Parker, G. V., 1965)。これら形容詞を用いたMFテストも、また一次元尺度である。しかし、これらの研究で一致した性差が見出されたのは、分析した全形容詞のうち一九形容詞(二三%)に過ぎず、その一次元性はのちに修正されることになる(Heilbrun, A. B., Jr., 1981; 後述)。

初期の一次元MFテストの開発以降一九七〇年代に入るまで、ゴウの研究以外に目ぼしいMFテストは作成され

表6 ゴウ・ハイルブランの ACL-SRS

	男性向き 形容詞の例	女性向き 形容詞の例
ゴウ・ハイル ブランとパー カーの研究で 性差の一致し たもの	自信に満ちた 慎重な 意欲的な 説得力のある 先見の明のある 独創的な 利口な 男性的な 自信のある 頭の切れる	役に立つ 繊細な 感傷的な 正直な 思いやりのある 暖い 鑑賞力のある 情緒的な 女性的な
ゴウ・ハイル ブランの研究 で性差が検出 されたもの	独断的 自負心の強い 冷笑的な 支配的な 率直な	友好的な

注) ①回答方法：全形容詞より自己記述に合致するものを選択。②採点方法：(選択された女性向き形容詞数) - (選択された男性向き形容詞数)。

(Gough, H. G. & Heilbrun, A. B., Jr., 1965)

さ・女らしさの概念の再検討がせまられるなかで、一次元MFテストからの脱却は、まだ実現しなかったのである。(5)

三 二次元MFテストの開発へ——両性具有概念の導入

一九七〇年代に入り、初期の一次元MFテストを脱却する契機となったのは、一九七三年のコンスタンチノープルの論文であった(Constantinople, A., 1973)。この論文で、既存のMFテストの一次元性および両極性(男らしさの反対極が女らしさであること)の二つの仮説に対する疑問・批判が展開された。

ていない。それは、初期の三つのMFテストを中心に、性差の検出される項目の洗い直しや、コンピュータの発展にもなう因子分析法による次元の再検討がなされてきたことによる。それと同時に、性の差別撤廃の公民権運動が一九六四年法の成立により一応成功した社会状況は、その後の性差研究の契機となったマッコビー編の『性差の起源(The Development of Sex Differences)』の発刊をもたらし、性差の現象のとらえ直しが始まった(Macoby, E. E. ed., 1966)。この時期には、初期の一次元MFテストが性差別的であるというような非難・攻撃は、すくなくとも心理学関係の論文には見あたらないが、しかし同時に、それらに言及されることもなかった。男らし

表7 ベムのBSRI

M スケールの項目	F スケールの項目
リーダーとして活躍する	愛情の深い
攻撃的	愉快な
野心的	子どもっぽい
分析的	情け深い
独断的	乱暴な言葉を使わない
スポーツマン的	傷つけられた心を癒すのに熱心な
競争的	女性的
自己の信念を弁護する	お世辞をいう
支配的	温和な
力強い	だまされやすい
指導力のある	子ども好き
独立的	忠実な
個性的	他人の要求に敏感な
決断がはやい	恥しがりやの
男性的	口調の柔らかな
自力本願的	思いやりのある
自立的	やさしい
強いパーソナリティ	分別のある
スタンドプレーを好む	あたたかい
冒険に挑む	従順な

(Bem, S. L., 1974)

翌一九七四年に早くもベムにより二次元MFテストである「ベム性役割インベントリ」(Bem Sex-Role Inventory: BSRI)が作成された(Bem, S. L., 1974)。BSRIは、ACLSRSを発展させたもので、男性・女性それぞれにとって社会的に望ましいと評価され、その評価に性差の検出された形容詞から成るMスケール(二〇形容詞)とFスケール(二〇形容詞)という二つの独立次元の下位スケールにより構成されている(表7)。ベムはここで、家族社会学者パソンス・ベールズによる「道具的(instrumental)」「表出的(expressive)」の原理に基づき、Mスケールを道具的次元、Fスケールを表出的次元と概念化した(Parsons, T. & Bales, R. F., 1953)。さらに、MおよびFスケールそれぞれについて算出されたM得点の平均からF得点の平均を引いた値の絶対値 $|F-M|$ を用い、この値の大きい場合を性別タイプ

(sex-typed)⁽⁶⁾、小さい場合を非性別タイプ(non-sex-typed)すなわち両性具有タイプ(androgynous)と定義した。そして、ベムは、両性具有タイプが他のタイプにくらべ、より「心理的健康(psychological health)」状態にあるとした。このように、ベムは約三十年間続けてきた二次元MFテストから脱却し二次元MFテストをはじめて開発し、各次元の理論的考察を行い男らしさ・女らしさの操作的定義から脱却し、しかも両性具有を操作的にも定義した業績により、学界でも高く評価されたのである。もっともベムによる両性具有の操作的定義では、MおよびF得点が高くて、また、ともに低くても両性具有と

判定される。のちに、この点はスペンスらに批判され、ベムもこの批判を認めることになる(Spence, J. T. et al., 1975; Bem, S. L., 1977)。

ベムのBSRIに続いて、翌一九七五年にスペンスらにより「個人的属性質問紙(Personal Attributes Questionnaire: PAQ)」が作成された(Spence, J. T., Helmreich, R. & Stapp, J., 1975, 1978)。PAQは、各々独立のMスケール、Fスケール、MFスケールの三下位尺度から構成されている。MスケールとFスケールは、両性にとって望ましいと評価されるが、一方の性で典型的である形容詞(前者は二三、後者は一八)から成り、MFスケールは、両性で社会的望ましさを評価が逆転している形容詞一四から成る。スペンスらは、三年後に各スケール八項目から成る簡略版を作成した(表8)。ここで、スペンスらは、ベムが基盤としたパーソンズらによる「道具的—表出的」原理に加え、ベーカーによる「行為的(agentive)—共有的(communal)」原理から、Mスケールを道具的・行為的次元、Fスケールを表出的・共有的次元、MFスケールをこれらの混合次元とした(Baker, D., 1966)。さらに、両性具有の操作的定義においても、スペンスらは、ベム批判にたち、MおよびF得点ともに男女合計のメディアンより高い場合のみ両性具有とし、いずれもメディアンより低い場合をクロス・セックスないし未分化と区別した。そして、ベーカーの理論にしたがい、両性具有を、変貌する社会においてもっとも柔軟に適應でき、人間として望ましいあり方と積極的に評価した。このように、スペンスらは、両性具有スケールともいうべきMFスケールを含むMF三次元尺度の作成を試みたが、MFスケールはMスケールと正相関、Fスケールと逆相関する結果となり、成功せず、実質は二次元MFテストに終わった。

さらに翌一九七六年には、パウコムが、ゴウらのCPIの全項目の性差分析に基づき、「CPI—MFスケール(CPI—Masculine Feminine Scales)」を作成した(Baucorn, D. H., 1976)。すなわち、男性の回答率が七〇%以上で女性が一〇%以下の項目五四から成るMスケールとその逆傾向の項目四二から成るFスケールの二つの下位尺度をもつ二次元MFテストを作成したのである。ここでパウコムは、両性具有の操作的定義(得点の高低の分割基準)に、スペンスらのよ

うに男女合計したメディアンを用いずに、男女それぞれ高得点三分の一、低得点三分の一の値を用いた。同時期に、一次元MFテストであるACL—MFを開発したハイルブランが、これを二次元尺度すなわちMスケール(二八項目)とFスケール(二六項目)に改訂した(Heilbrun, A. B., 1976)。このうち、ハイルブランは、両性具有の操作的定義に、 M — F 方式を發展させ、 $(M+F)$ — $(M-F)$ という公式を用いた。二次元下位尺度を用いながら、両性具有のいわば一次元テストの開発を試みたといえる。

表8 スペンサーらのPAQ(簡略版)

Mスケールの項目	Fスケールの項目	MFスケールの項目
2 依頼心が非常に強 — 依頼心がない	3 全く感情的でない — 非常に感情的である	1 全く積極的でない — 非常に積極的である
6 非常に受身である — 非常に能動的である	7 敵意的になること — おおいに敵身的に が全くできない — おおいにできる	4 非常に従順である — 非常に支配的である
10 競争心が全くない — 非常に競争心がある	8 非常に荒っぽい — 非常におとなしい	⑤ 重大な危機にでも — 重大な危機に非常 に興奮しない
⑨ 決断を簡単に下せ — 決断を下すのに困難を伴う	9 人のために自分を — 人のために自分を 役立たせることが — 役立たせることが できない	11 非常に家庭志向的 — 非常に社会志向的 である
17 非常に簡単にあきらめる — 簡単にはあきらめられない	12 全く親切でない — 非常に親切である	⑩ 自分のやったこと — 自分のやったこと を他人に認めても — を他人に認めても である — 無関心である
19 全く自信がない — 非常に自信がある	15 全く人の気持ちに — 非常に人の気持ち 心を配らない — に心を配る	⑭ 全く傷つかない — 非常に傷つきやすい
20 強い劣等意識を持つ — 非常に優越感を持っている	21 他人を全く理解しない — 他人を非常に理解する	⑮ 決して泣かない — すく泣く
24 圧力に屈する — 圧力によく耐える	22 他人との関係において非常に冷たい — 他人との関係において非常に温かい	⑯ 安心を得るために — 安心を得るために 何らかの保証をば — 何らかの保証を非 んど必要としたら — 常に強く必要とする

注) ① 5段階評定(0~4点)。②表中番号は項目番号。③項目番号を丸で囲んであるものは、他の項目と採点方向が逆。(Spence, J. T., et al., 1978; 東小倉, 1984より作成)

両性具有とはじめて名づけられたテストは、ベルジンらによる「両性具有テスト (Androgyny Scales: ANDRO)」である (Bergins, J. I., Welling, M. A. & Wether, R. E., 1978)。このテストは、ジャクソンによる「パーソナリティ・リサーチ・フォーム (Personality Research Form: PRF)」の全項目の各性にとつての社会的望ましさの評価の性差分析に基づく、独立次元のMスケール(二九項目)、Fスケール(二七項目)から構成されている。ここで、Mスケールは「支配的―道具的」次元、Fスケールは「養育的―表出的」次元と概念定義され、両性具有は、スペンスらと同様に、二次元のメディアン分割による四タイプのひとつ(MおよびF得点がメディアン以上)と操作的に定義される。スペンスらと異なるのは、両得点ともに低いタイプを、未決定 (indetermined) と名づけた点である。

以上述べてきた、一九七〇年代のベムに先鞭がつけられた主な二次元MFテストの特徴を、表9に示す。

これらのテストに共通している第一は、MスケールとFスケールをそれぞれ独立次元とした単極二次元MFテストであることである。約三十年続いた一次元MFテストから二次元MFテストへの先鞭をつけたベムの研究が学会で高く評価されたのも当然である。

第二に、バウコムの研究をのぞき、MおよびFスケールの理論的概念の検討がなされていることである。そのさい、パーソンズ・ベールズやベイカンの理論が援用されている。この点でも、約三十年続いた男らしさ・女らしさの統計的概念克服の先鞭をつけたベムの研究は高く評価される。

第三に、両性具有の概念を、生物学的概念から解放し心理学的概念として操作的にも定義していることである。これらのテストで両性具有と判定されるタイプは、既存の一次元MFテストでは、ゼロ点(中央の値)近くなり、男らしくも女らしくもないと問題にもされなかった。また、非男性的男性は、即女性的であり、望ましい男性基準からの逸脱者・問題あり(女性はその逆)と判定された。これに対し、とくにスペンスらの研究以降、両性具有はむしろ社会状況の変化に対応できる人間らしい生き方として積極的に評価されている。したがって、両性具有を心理学的に概念化す

表9 5つの2次元MFテストの比較

	BSRI	PAQ	ACL-SR	CPI-MF	ANDRO
	Bem (1974)	Spence et al. (1975)	Heilbrun (1976)	Baucom (1976)	Berzin et al. (1978)
テストの次元と両性具有の定義					
(分割基準)	道具的(20) 表出的(20) $(A = \frac{M}{M-F})$	道具的・表出的(23) 表出的・共有的(18) 混合(14)	道具的(28) 表出的(26) $(A = \frac{M+F}{M-F})$	(性別分布の1/3) 統計的概念(54) による(42)	(性別分布の) 1/3 (メソダイア)
理論 (項目数) M F MF					
準拠テスト			ACL	CPI	PRF
項目抽出の基準	社会的望ましさの 評価の性差	社会的望ましさの 評価の性差	父と同一視する男子と 母と同一視する女子の 回答比率差	回答比率の性差 ($M > 70\%$ から $F < 10\%$; M) ($M < 10\%$ から $F > 70\%$; F)	社会的望ましさの 評価の性差
項目のタイプ	形容詞(肯定的)	形容詞(肯定的)	形容詞(肯定的-否定的)	叙述文(行動)	叙述文(性役割行動)
回答形式	7段階評定	4段階評定	yes or no	true or false	true or false
個人の分類	なし(1次元)	あり	あり(1次元)	あり	あり

る契機をつくった点では、ベムが高く評価されるものの、その具体的な操作的定義とその積極的評価の先靴をつけた点では、むしろスペンスらの方が高く評価されよう。

もっとも両性具有の操作的定義では、ベム・ハイルプランのように両性具有を一次元尺度で測定しようとする方式と、スペンスらに始まったMおよびF尺度を用いた四分割ないし六分割方式とがある。いずれの方式においても、研究者により具体的手続きには違いがみられる。

また、項目抽出の基準でも、社会的望ましさの評価の性差を基準とするベム他の方式と、これに各性の典型すなわち回答比率の性差を基準とするスペンス他の方式とある。

さらに、項目のタイプにおいても、ベムをはじめとする形容詞を用いるタイプと、バウコム・ベルジンのように叙述文を用いるタイプとある。前者は、肯定的形容詞のみ用いるテストと、肯定的—否定的という両極の形容詞を用いるテストがあり、また何段階の評価とするかにも違いがある。

このように、一九七〇年代の二次元MFテストには、共通点と相違点があるが、すでに述べたように両性具有とはじめて名づけられたテストは、ベルジンらによるANDROテストである。このテストを、クックは『第二世代の』両性具有測定具』の開発とときわめて高く評価している(Cook, E. P., 1985, p. 43)。しかし、表9を見る限り、テスト名以外格別新しいテストとして評価されるべき点はない。このことは、すでに述べてきた一次元MFテスト開発以降の経過からも明らかである。

ともかく、一九七〇年代は、約三十年間評価されてきた一次元MFテストから二次元MFテストへ、すなわち、男らしさ対女らしさの両極一次元の概念から男らしさと女らしさそして両性具有の概念へと脱却・発展した時代であった。

四 両性具有研究の発展

すでに述べてきたように、ベムのBSRIの開発は、両性具有という生物医学的概念を心理学的に概念化する契機となり、一九七〇年代には続々と両性具有を測定するテストが開発された。それを機に、測定方法のみならず両性具有の概念や理論の研究が、とくに一九八〇年代に入り盛んに行われるようになった。

まず、方法的には、項目抽出の基準に、社会的望ましき(social desirability)の評定の性差を用いるか(ベム他)、一次元MFテスト以降の回答比率の性差を用いるか(パウコム他)という問題がある。前者の場合、とくに社会的に望ましい項目のみから構成されたテスト(BSRI、PAO他)では、黙認傾向(aquiescence)⁽⁶⁾が関与し、両性具有の傾向が過大評価されている可能性がある(BSRI: Millmet, C. R. & Votta, R. P., 1979)。後者の場合、回答比率の性差を分析する項目母集団が十分概念的に検討されていない限り、そのテストにより測定されるものは統計的概念の域を脱却できない。既存のパーソナリティ・テスト項目を母集団項目とするパウコムのMFテストは、この点問題があらう。

また、MおよびFスケールの一次元性が、十分実証済みであるともいえない(例BSRI: Gaudreau, P., 1977他)。テスト理論において、一次元性の実証は、因子分析によることが多いが、因子分析の結果は、分析に用いた項目やサンプルに左右される。とくに男らしさ・女らしさのように、文化・社会・時代により変化する概念を測定するテストの一次元性をどのように考えるべきかについて、議論は十分でない。

さらに、MおよびFスケールの独立性についても、問題が指摘されている(Cook, E. P., 1985)。MおよびFスケールが完全に独立であるならば相関係数はゼロもしくは統計的検定により無相関とならなければならない。しかし、各テストの両スケールの相関係数は、男女こみで $-.34 \sim .09$ 、男女別には男子の方が女子より高くなる傾向にある。Mお

よびFスケールにおける回答の一貫性が、全般に男子の方が女子より高いためでもあろう。なぜこのような性差が生じるかについての議論はまだ推測の域を脱してはいない。

つぎに、両性具有の概念については、三つの視点から検討されてきている。その第一は、各テスト間の相関分析による構成概念妥当性(construct validity)の検討である。もし各テストのMもしくはFスケールがそれぞれ同一のものを測定しているならば、MもしくはFスケール同士の相関は完全な正の相関(1.0)もしくは統計的に有意な正の相関とならなければならない。しかし、その相関のメディアンは、Mスケールで.65、Fスケールで.53であり、性別では全ならぬ女子の方が相関が低い(Cook, E. P., 1985)。各テストのMおよびFスケールは、同一の内容を測定しているとは言い難いのである。とくに、異なる項目形式・形容詞(叙述文か)や内容のテスト間で相関が低くなる傾向がある(例BSRIFとCPI-Eの相関は女子で.16)。したがって、両スケールの得点結果によって判定される両性具有のタイプとその概念は、現段階では同一のものとはいえないのである。

このことは、個人の性別タイプ、両性具有タイプ、未分化(または未決定)タイプの判別結果の分析という第二の検討からもいえる。両性具有タイプと判定された男子は、PAQによる場合がもっとも多く二九%、BSRIがもっとも少なく二二%、女子はCPIで三三%、ANDROで二〇%と、男子で八%、女子で一三%の差異が生じている。⁽⁹⁾これらの差異は、タイプの判定基準が異なるからでもある(表9)。いずれの基準が妥当であるかについても論争は続いており、結論は出ていない。

概念的検討の第三は、両性具有が人間として望ましい存在様式であり、変貌する社会でより適応的であるという積極的解釈に関するものである。⁽¹⁰⁾その検討のひとつに、職業上の成功や職歴パターン、結婚生活への満足度や役割分担パターン、対人関係や課題解決場面における柔軟性、パーソナリティ・テストを用いての不安や心理的適応などにおける、両性具有の概念の妥当性検討がある。もうひとつは、臨床的事例研究に基づく検討である。とくに一九八〇年代に入

り、アルコール依存症やホモセクシュアルなど、いわば不適応事例の治療研究のなかで、性の問題が論じられてきている。

これら概念的検討において、基本的に問題とされるのは、両性具有の概念が、男性・女性という生物学的性の区別と、男らしさ・女らしさという心理学的性の区別を出発点として(11)いる点である。心理学的性差は、生物学的性差と社会的につくられた性差の結果であり、現象的性差にほかならない。現象的性差は、生物学的性差と区別されなければならないが、性差研究は、いまだそこに至ってはいない。変貌する社会において、横断的研究や縦断的研究、コホート分析(世代間分析)、さらに比較文化的研究により、データを蓄積することにより、両性具有の概念もより明確になる。

最後に、理論的検討について言及しておく。第一は、一次元MFテスト以来のパーソナリティ^{トイ}特性論である。スペンスらは、この見解に立ち、両性具有をパーソナリティの一特性とみなす。特性論は、パーソナリティ・テストにより客観的に裏づけられているものの、人間理解の基本的立場が要素主義的・静的であると批判もされてきている。パーソナリティ・テスト項目の性差分析に基づくMFテスト・スケールは、パーソナリティ・テストの他の下位尺度に比べ、多領域の興味・行動・態度などが含まれ、より統計的・要素主義的であることは否定できない。

第二には、これと対照的に人間を全体的・動的に理解しようとする臨床心理学における理論がある。その代表は、ユングによるアニマ・アニムス論であろう(参照、河合隼雄、一九六七、『ユング心理学入門』培風館)。臨床心理学的理論は、来談者の相談・治療過程に裏づけられているものの、その普遍性において相対的に客観性に欠ける事実も否定できないだろう。

第三には、性役割獲得に関する諸発達理論すなわちフロイトによる精神分析の理論、コールバーグによる認知発達理論、バンデューラによる社会的学習理論、エリクソンによる性アイデンティティ生涯発達理論などがある(参照、渡

邊惠子、一九八四)。これらの理論では、生物学的性別による性別役割の獲得が前提されており、その獲得の「失敗」(両性具有も含まれる)は、逸脱ないし問題ありとみなされがちである。また、エリクソンの理論をのぞき、幼児期の発達に限定されている。一次元的男らしさ・女らしさの発達理論は、幼児期から出発したが、両性具有概念の導入は、成人期から出発した。筆者は、わが国の生涯にわたる性別役割獲得過程のモデルを提唱し、男性のそれを直線型、女性のそれを葛藤型と名づけた(渡邊惠子、一九八四)。このモデルに両性具有の概念を導入するならば、男性は伝統的男性性役割を直線的に獲得していくのに対し、女性は幼児期から両性具有の性別役割を獲得していくともいえる。現在なおこうしたパターンが根強いとはいえ、自己の性の受容という視点から見ると、そのパターンの転換もしくは崩壊の兆しもうかがわれる(渡邊惠子、一九八九)。

第四に、両性具有研究から派生したベムの性別認知スキーマ理論(gender schema theory)がある(Bem, S. L., 1981a)。ベムは、知覚や決定における伝統的な性による区別に基づく認知様式を、性別認知スキーマと名づけ、両性具有タイプの認知は、そうでないタイプより、性による区別から自由であり解放されていると指摘した。以上述べてきたように、両性具有の研究は、とくに一九七〇年代のテスト開発にともない、テスト内、テスト間、他種テスト間の分析、さらに両性具有の概念や理論の検討へと発展してきている。

おわりに

本稿では、米国における男らしさ・女らしさを両性具有の心理学的測定研究の歴史的動向をたどった。とりあげた研究がすべてではなく、テスト作成を試みた主な研究を中心に述べてきた。一九三〇年代に始まる一次元MFTテストをやや詳しくとりあげたのは、当時の発想が今なお引き継がれているからである。

歴史的動向をたどると、一次元MFテストの開発から二次元MFテストの開発まで、すなわち、一次元的な男らしさ—女らしさの概念から両性具有の概念へと発展するまで、約三十年かかっていることに驚かされる。心理学的測定は、個々人の反応を基礎にしているから、男女平等の思想が日本よりはるかに進んでいる米国においてすら、その思想が個人の心理に及ぶのには年月がかかるのであろう。そもそも男らしさ・女らしさ・両性具有は、個人の生活の性役割分担すなわち仕事・家事・育児・介護の分担に関わる社会的期待やその認知、それに応じた態度や行動、さらにアイデンティティを含んだ心理学的概念である。したがって、男女平等の思想が、社会的レベルの主義主張や行動にとどまらず、個人レベルの生活様式や心理に及ばない限り、両性具有の測定は可能とならない。それゆえにこそ、MFテストが一次元から二次元へと発展するのに三十年かかったともいえるのである。

両性具有の測定法、概念、理論のいずれにおいても、今なお十分精練されているとはいえないことは、本稿で述べた。両性具有的存在様式が、社会的・個人的レベルで浸透し確立されるにともない精練されるのであろうか。

なお、本稿では、わが国における研究動向に言及できなかったので、稿を改めてとりあげたい。

(1) 本稿では、Masculinityを男らしさ、Femininityを女らしさという語で統一する。ほかに男性度・男性性、女性度・女性性といった語や、これらの概念をさし性度という語が用いられている。村中兼松によれば、性度という語が用いられたのは、松井三雄による一九三三年の論文からである(村中兼松、一九七四)。

(2) MFテストを、性度検査と訳したのは、一九五四年の南条正明の論文である(村中兼松、一九七四)。

(3) 「男性性倒錯者が質問紙に対して率直に回答すれば、そのほとんどがMf尺度のT得点(最終得点)が高くなる。しかし、Mf尺度で高得点を得たからといって、同性愛を実行しているとは限らない。……(略)女性の高得点に関しては、男性のような性的倒錯の臨床例は十分に見出されていない」(日本MMP-I研究会編、一九六九、二二—二四頁)。

(4) 渡邊恵子、一九八三、「知能の遺伝」環境論争』『神奈川大学心理・教育研究論集』一号、五〇—六四頁。

- (5) マッコビイらによる「性差の起源」に対してブロックが批判したのも、一九七〇年に入ってからのことである(Block, J. H., 1973)。
- (6) androgynous, androgyny という語は、ギリシヤ語の「男の(andro-)」と「女の(-gynous)」を連結させたもので、もとは男女両性具有、両性奇形(半男半女、とくに女性偽半陰陽)をさす生物・医学的用語であった。近年、日本の心理学では、(心理的)両性具有(的)、男女両性具有(的)、両性(的)といった語が用いられている。
- (7) ベムは、この業績により一九七六年米国心理学会(A.P.A)より若手研究者に与えられる賞を獲得した。
- (8) 黙認傾向とは、社会的に望ましい項目には「はい」と回答しがちな傾向をさす。
- (9) 性別タイプの判定では、さらにくい違いは大きく、Mスケールでは男子最大二七%、Fスケールでは女子最大二八%の差異が生じている。
- (10) たとえば、ヘーカンは、「人格の成熟(personal maturity)」、ナムは「心理的健康(psychological health)」、ブロックは「行為性と共有性の均衡の成功(successful balancing of agency and communion)」と表現している。
- (11) MおよびFスケールはいうまごまなく、しまようごによれば、ユングの理論もまた「男性主導型思考」に限界があると指摘されている(しまようご、一九八五、『フェミニスト・サイコロジイ』垣内出版)。
- (12) 男は仕事、女は家事・育児という性別役割分担パターンは、産業構造の変質すなわちいわゆる近代化によってもたらされたといわれる。現在でも、西欧的近代化が急速に進められている国々では、こうした性別役割分担の分化が進行し、かえって女性の地位の低下をまねく危惧があるとも指摘されている(Lepwosky, M., 1985)。

引用文献

- (1) 東清和・小倉千加子、一九八四、『性役割の心理』大日本図書。
- (2) Bakan, D., 1966, "The Duality of Human Existence", Rand McNally.
- (3) Baucum, D. H., 1976, "Independent masculinity and femininity scales on the California Psychological Inventory", "Jour-

- nal of consulting & clinical Psychology", 44, 876.
- (*) Bem, S. L., 1974, "The measurement of psychological androgyny", "Journal of consulting & clinical Psychology", 42, 155-162.
- (5) ———, 1977, "On the utility of alternate procedures for assessing psychological androgyny", "Journal of consulting & clinical Psychology", 45, 196-205.
- (6) ———, 1981, "Gender schema theory", "Psychological Review", 88, 354-364.
- (7) Berzins, J. I., Welling, M. A. & Wetter, R. E., 1978, "A new measure of psychological androgyny based on the Personality Research Form", "Journal of consulting & clinical Psychology", 46, 126-138.
- (8) Block, J. H., 1973, "Conception of sex role: Some cross-cultural and longitudinal perspectives", "American Psychologist", 28, 512-526; in Block, J. H., 1984, "Sex Role Identity and Ego Development", Josey-Bass, 1-30.
- (9) Constantinople, A., 1973, "Masculinity-femininity: An exception to a famous dictum?", "Psychological Bulletin", 80, 389-407.
- (10) Cook, E. P., 1985, "Psychological Androgyny", Pergamon Press.
- (11) Gaudreau, P., 1977, "Factor analysis of the Bem Sex Role Inventory", "Journal of consulting & clinical Psychology", 45, 299-302.
- (12) Gough, H. G., 1952a, "Identifying psychological femininity", "Educational Psychological Measurement", 12.
- (13) ———, 1952b, "Reference Handbook for the Gough Adjective Check List", Institute of Research Assessment.
- (14) ———, 1957, "Manual for the California Personality Inventory", Consulting Psychologists Press.
- (15) ——— & Heilbrunn, A. B., 1965, "Manual for the Adjective Check List and the Need Scales for the ACL", Consulting Psychologists Press.
- (16) Hatherway, S. R. & McKinley, J. C., 1943, 1951, "The Minnesota Multiphasic Personality Inventory", Psychological Co-

operation : 日本 M M P I 研究会編、一九六九、『日本版 M M P I ハンドブック』三京書房。

- (17) Heilbrun, A. B., Jr., 1976, 'Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions', "Journal of consulting & clinical Psychology", 44, 183-190.
- (18) Maccoby, E. E. ed., 1966, "The Development of Sex Differences", Stanford University Press.
- (19) Millinet, C. R. & Votta, R. P., 1979, 'Acquiescence of the Bem SE Sex Role Inventory', "Journal of Personality Assessment", 43, 164-165.
- (20) 村中兼松、一九七四、『性度心理学』帝国地方行政学会。
- (21) Parker, G. V., 1969, 'Sex differences in self-description of the Adjective Check List', "Educational Psychological Measurement", 29, 99-113.
- (22) Parsons, T. & Bales, R. F., 1953, "Family, Socialization and Interaction Process", Free Press.
- (23) Spence, J. T., Helmreich, R. & Stapp, J., 1975, 'Ratings of self and peers on sex-role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity', "Journal of personality and social Psychology", 32, 29-39.
- (24) Spence, J. T. & Helmreich, R. L., 1978, 'Masculinity and Femininity : Their psychological dimensions, correlates and antecedents', University of Texas Press.
- (25) Strong, E. K., Jr., 1936, 'Interests of men and women', "Journal of social Psychology", 7, 49-67.
- (26) ———, 1943, "Vocational Interests of Men and Women", Stanford University Press.
- (27) Terman, L. M. & Miles, C. C., 1936, "Sex and Personality", McGraw Hill.
- (28) 渡邊恵子、一九八四、『性役割獲得の性差』村田泰彦編著『生活課題と教育』公生館、二〇四—二二九。
- (29) ———、一九八九、『自己の性の受容にみられる男子葛藤型・女子直線型』『神奈川大学心理教育研究論集』七号。